

難波西鶴と海之道

【85】

森田 雅也

前回から西鶴『武道伝来記』(貞享4(1687)年刊)巻七の三「新田原藤太」の薩摩の話です。ある夜、鹿児島城の一室で泊まり番を勤めていた沖浪大助は、たまたま天井から落ちてきた黒い物を抜き打ちに斬り払います。正体は「百足」でしたが、同僚の中辻久四郎がもてはやすまま、平安時代の百足退治で有名な「田原藤太」気取りになっ

てしまします。もっとも、そんな悪戯(ごま)だけは、その場限り、笑い捨てにします。ところが後日、大助が町を通りかかった時、成り上がりの重役、南江主善に出会いますが、その時、「これ藤太殿、どこへお越しだ」と声をかけられました。大助は「私の名前は大助だ。藤太などという名乗りは致さぬ」と言い返しますが、「百足退治の話は、家中のうち、誰知らぬ者はいない」と言っ

て、再度、「田原藤太殿」とからかわれます。怒り心頭に発した大助は、この百足事件を最も知る久四郎の宅に行き、うわさを聞いたことへの苦情不服を申し立てて詰め寄ります。ところが久四郎は「なるほど私が言い、ならしたなら、決闘にも応じるが、身に覚えがない。この件は当日、同室で寝ていた2人の仕業に違いない」と大助を納得させます。前回紹介したように、大助らが夜勤していた一室には、他に浮橋太左衛門と巻田新九郎の2人が寝ていました。大助はあまりに頭に血が上っていたのでしよう。そのまま一人で「田原藤太殿」と言った主善の屋敷へ乗り込み、主善を斬り捨てます。主善の弟善八が斬りかかってきますが、これも討ち、家来たちも討ち果たして、心静かに立ち退きます。

この事件を知った藩主は事件の調査をしますが、久四郎からの命がけでの「非は主善にあり」という申し立てを取り立て、主善の罪とし、お家お取り潰しと裁決されます。さらに「この件では久四郎の申し立ての心情一番」と藩主から数々

遺子の奇怪な秘話

のお褒めの言葉を頂き、帰宅します。主善側では受け容れがたい裁決です。しかし、6歳の遺子善太郎は母とともに家来筋の家で養われます。月日が経ち、16歳となった善太郎は、親の敵を討ちたいと九州を回ります。4、5年も無駄に過ごした後、四国にわたり、阿波の磯崎に着きます。

善太郎は、その地の庵の住持と知り合い、一夜の宿とします。その夜、夢うつつのうちに、たけ十丈(約30どあまり)ほどの血みどろの「百足」が枕元に現れます。そして、「私はそなたの故郷坊津に住むものです。そなたの敵は撰津の国小曾根(現西宮市)にいます」と告げて消えてしまします。奇怪ですね。次回にて。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

からかう南江主善討つ